

各指導類型の長所・短所をふまえて教育課程の編成をします

島根県では、県独自の加配により、2・3年、4・5年の組み合わせの複式学級が存在しないこともあり、これまで30年間、複式学級を有する多くの小学校において、算数以外の教科ではA・B年度方式(同教科同単元同内容同程度)による指導が行われてきました。それは、A・B年度方式に様々なよさがあるからに他なりません。

一方、A・B年度方式と同様に、他の指導類型にもそれぞれの長所や短所があり、それらをふまえて教育課程を編成する必要があります。

A・B年度方式と学年別指導の長所と短所は次のとおりです。

☀ A・B年度方式

○ 長所

- ・多く的人数で学べ、多様な見方や考え方が出ることが大きい。
- ・個に応じた指導をする時間を生み出しやすい。
- ・授業の準備等の教員の負担が少ない。

△ 短所

- ・系統的な内容の指導、特に技術的な面の指導が難しい。
- ・下学年の児童の能力差や経験差が埋められない場合が多い。
- ・転出入児童に対する学年を超えた内容についての未学習への対応が必要。

☀ 学年別指導

○ 長所

- ・通常のカリキュラムで学習できるので、教科の系統性をふまえた指導ができる。
- ・転出入児童に対する学年を超えた内容についての未学習への対応が必要ない。
- ・特に学年による差の大きい1・2年生において指導がしやすい。

△ 短所

- ・必然的に直接指導と間接指導の組み合わせとなり、指導が複雑で難しい。
- ・2学年分の教材研究や学習の準備が必要となり、教員の負担が増す。

したがって、児童や学級、地域の実態を把握し、各指導類型の長所、短所をふまえたうえで、年間指導計画を作成し、児童の成長につながる教育課程を編成することが求められます。

教育課程の編成にあたっては、平成28年3月発行の「複式学級指導の手引き(平成27年度改訂版)」を参考にしてください。

単式学級には学年別の順序によらない教育課程編成は認められていません

〜 単式から複式へ、複式から単式へ移行する学級における教育課程編成に留意を〜

複式学級においては、特例として学年別の順序によらない教育課程編成が認められています。一方、単式学級においては、この特例は認められておらず、小学校学習指導要領に示されている当該学年の目標及び内容で学習できるよう教育課程を編成しなければなりません。

詳しくは、平成29年1月18日付け島教指第1085号「複式学級を有する小学校の教育課程編成について(通知)」に添付の別紙「複式に移行する単式学級及び単式に移行する複式学級における教育課程編成の留意点(平成29年度用)」を参照していただくとともに、不明な点は、学校を所管する各市町村教育委員会に問い合わせください。



翌年度複式学級になる単式学級の奇数学年(1・3・5年)と、翌年度単式学級になる複式学級の奇数学年(1・3・5年)の教育課程編成に特に留意が必要です。



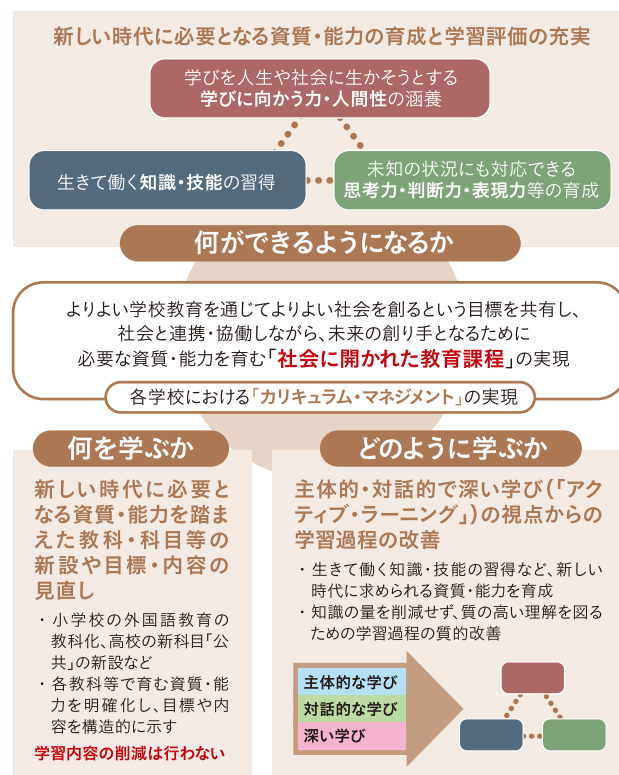
複式学級から単式学級へ「学びかた」を発信！ 「主体的・対話的で深い学び」が実現する授業づくりを

新しい学習指導要領の基本的な方向性が示された平成28年12月の中央教育審議会の答申の中では、子供たちが「何ができるようになるか」を明確にしながら、「何を学ぶか」という学習内容と、「どのように学ぶか」という学びの過程を組み立てていくことが重要であることが述べられています。

「どのように学ぶか」ということについて、「子供たちは、主体的に、対話的に、深く学んでいくことによって、学習内容を人生や社会の在り方と結びつけて深く理解したり、未来を切り拓くために必要な資質・能力を身に付けたり、生涯にわたって能動的に学び続けたりすることができる」という考え方のもと、学びの質に着目して授業改善の取組を活性化しようというのが、今回の改訂の目指すところです。

複式学級指導では、児童が主体となり、友達との対話を通して自分の考えを広げたり深めたりできるような授業を展開するために、どのように学ぶ場を設定するかが授業づくりのポイントです。こうした複式学級指導の在り方を学ぶことは、単式学級、複式学級に関わらず、「主体的・対話的で深い学び」(「アクティブ・ラーニング」)の視点からの授業改善を進め

参照：幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)



ていく上で、すべての教員にとって大切なことです。子供の声で授業をつくっていきましょう。

☀ 複式学級指導の充実にご活用ください

平成26年度から、複式学級指導の充実に向けた県内の教員向けの支援として、複式教育総合支援事業を実施しています。本リーフレットで紹介した複式教育推進指定校事業もそのうちの1つです。その他の取組や島根県教育センターにおける研修等を紹介いたしますので、各校での複式学級指導の充実にご活用ください。

- (1)複式学級指導の手引き(平成27年度改訂版)の発行(ポータルサイトに掲載)
- (2)複式教育研修(平成29年度からは複式学級新任担当者研修に変更)
平成29年度は、初めて複式学級を担当する全ての教員及び希望者を対象に、6月に半日、2学期以後に1日(学校会場)の研修を実施する予定です。
- (3)出前講座の実施
島根県教育センターでは、複式教育をテーマにした「出前講座」を実施しています。平成28年度は学年

- 別指導の模擬授業等を実施しました。
- (4)先進地の実践事例の島根県教育用ポータルサイトへの掲載
他県の複式学級の国語・理科・社会の学年別指導の実践事例を掲載しています。各教科の特性や、学年別指導のポイント等に関する質問への回答等も記載していますので参考にしてください。



☐ 島根県教育用ポータルサイト > 幼稚園/小中学 > 教育指導課 > 学力育成 > 複式教育

島根県教育委員会 平成29年3月



複式学級指導充実のために 平成28年度複式教育推進指定校事業リーフレット

複式学級とは、どんな学級？

児童又は生徒の数が著しく少ない場合、数学年の児童又は生徒を1学級に編制することができます。このような学級を複式学級と言います。

※法的根拠：公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律(以下「標準法」という)

1学級の児童又は生徒の数の基準は、標準法で示す数を標準として、都道府県の教育委員会が定めることとされ、島根県教育委員会では、独自に以下のようにしています。

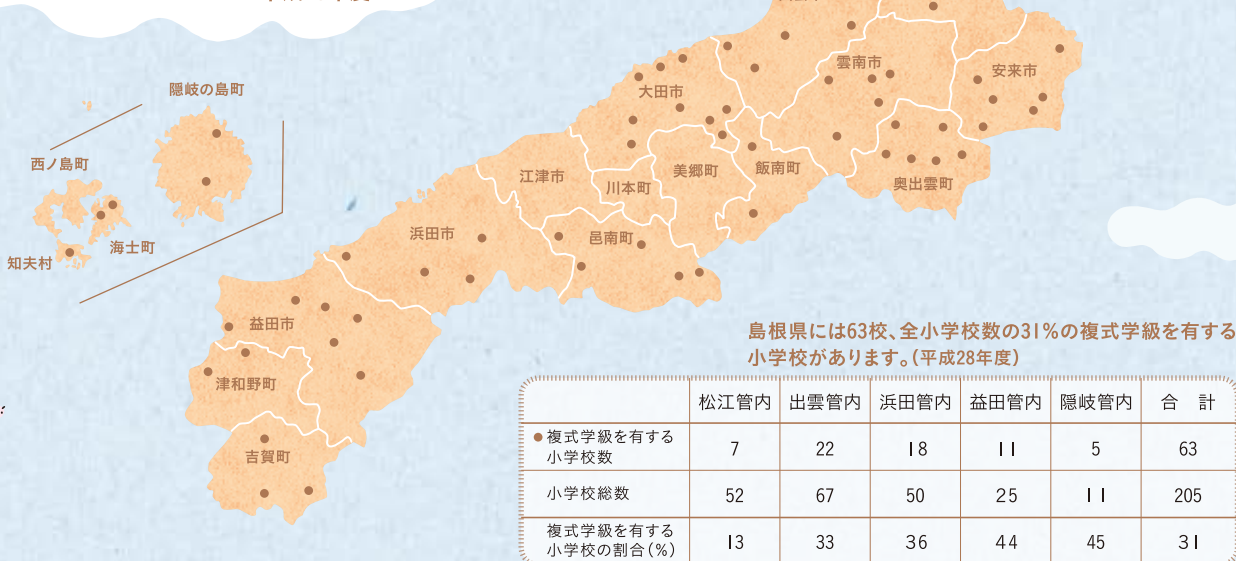
- ☀ 中学校…特別支援学級を除き、法律で示された基準の生徒数8人以下であってもすべて「単式学級」として編制する。(島根県独自)
- ☀ 小学校…複式学級の児童数は16人(第1学年を含む学級は8人)すべて1・2年、3・4年、5・6年の組合わせて編制する。(島根県独自)

島根県の複式学級を有する小学校の状況は、この10年で大きく変化しています

昭和50年代後半以降、島根県の複式学級を有する小学校数は、ほぼ90~100校の間で安定していました。しかし、ここ10年で複式学級を有する小学校数が30校近く減少しています。



複式学級を有する小学校 平成28年度



近年、児童数の減少により、単式学級から複式学級になったり、欠学年が生じ単式学級になったりすることが多く見られます。また、単複を繰り返す学校もあるため、異教科指導や同教科異単元指導、同教科同単元異内容指導(以下「学年別指導」という)による指導が必要となってきました。

複式教育推進指定校事業について

平成26年度から、これまで本県で取り上げられることの少なかった国語、社会、理科における効果的な学年別指導の在り方を研究し成果の普及を図ることを目的として、複式教育推進指定校事業を実施してきました。

平成29年度は、算数を新たに対象教科に加え、複式学級における学年別指導の充実を目指します。

平成28年度複式教育推進指定校の取組

- 複式学級を有する小学校3校(東部・西部・隠岐)を指定
- 内容
 - ・国語、社会、理科の学年別指導方法についての研究(学校が1教科を選択)
 - ・学年別指導の授業公開
 - ・先進地視察等
- 事業費:1校あたり30万円



複式学級の国語科指導

～児童の実態等をふまえた指導形態を～

●島根県の国語科で主流のA・B年度方式

平成25年度の調査では、県内の中・高学年複式学級の約8割が国語科においてA・B年度方式をとっていました。低学年では入門期ということもあり、約4割となっています。

A・B年度方式で国語科を指導することには、物語文や説明文の解釈に係る学習において間接ではなく直接に指導できるなど、児童にとってはより多くの人数で考えを深められるというよさが、教員にとっては教材・教具等の準備がしやすいというよがあります。

●実践に見るA・B年度方式「国語科」の課題

多くの小学校においてA・B年度方式が採用されている一方で、指導にあたる教員の方からは「下学年の児童が上学年の学習をするのが難しいことがある」「漢字の学習が学習内容と合わないことがある」といった声があがっています。

学習指導要領では目標と内容(漢字とローマ字を除く)が2学年まとめて示されている国語科ですが、教科書では目標と内容が下学年、上学年に分けて系統的・段階的に構成されています。多くの学校が採用している教科書準拠のドリル等も同様です。つまり、2学年分の教科書の内容を2分割するA・B年度方式では、下学年は背伸びし、上学年はステップを降りて学習するという課題が常に生じています。

●国語科を学年別で指導するにあたって

教科書の内容が系統的に示されている国語科の学年別指導には、児童が学年の段階に応じて系統的に学べるよがあります。

A・B年度方式が主流の本県において、これまで実践されることの少なかった国語科の学年別指導のよさと課題について、推進指定校の取組をもとに考えてみましょう。

平成28年度の取組

「奥出雲町立鳥上小学校」の取組

1 学校について

- 全校児童数 38名
- 複式学級 中学年、高学年
- 公開授業 高学年(5年9名、6年4名)
- 教科 国語



3 授業公開:平成29年1月27日(金)

- 第5・6学年 ●単元
- 校外参加者 14名

2 年間の取組

(1)先進校視察

- ◎広島県庄原市立口北小学校
- ◎和歌山大学教育学部附属小学校
- ◎新潟大学教育学部附属新潟小学校

(2)研究授業

- ◎5・6年複式国語科訪問指導(9月・1月)
- ◎島根大学大学院教育学研究科教職大学院視察

- 「朗読で発表しよう」大造じいさんとがん(5年)
- 「感動の中心をとらえよう」海のいのち(6年)

「大田市立鳥井小学校」の取組

1 学校について

- 全校児童数 52名
- 複式学級 中学年
- 公開授業 中学年(3年5名、4年9名)
- 教科 国語



3 授業公開:平成29年2月16日(木)

- 第3・4学年 ●単元
- 校外参加者 28名

2 年間の取組

(1)先進校視察

- ◎奥出雲町立鳥上小学校
- ◎広島県庄原市立口北小学校
- ◎広島大学教育学部附属東雲小学校
- ◎山口県周南市立湯野小学校(中四国へき研)
- ◎筑波大学附属小学校

(2)研究授業

- ◎3・4年複式国語科訪問指導(10月・2月)

- 「物語を紹介しよう」モチモチの木(3年)
- 「音読劇をしよう」木龍うるし(4年)

「海士町立福井小学校」の取組

1 学校について

- 全校児童数 49名
- 複式学級 高学年
- 公開授業 高学年(5年6名、6年8名)
- 教科 国語



3 授業公開:平成29年1月31日(火)

- 第5・6学年 ●単元
- 校外参加者 38名

2 年間の取組

(1)複式教育出前講座(9月)

(2)先進校視察

- ◎鹿児島大学教育学部附属小学校
- ◎奥出雲町立鳥上小学校
- ◎大田市立鳥井小学校

(3)研究授業

- ◎3・4年複式国語科訪問指導(7月)
- ◎2年単式国語科校内研究授業(10月)
- ◎5・6年複式国語科訪問指導(11月・1月)
- ◎3年単式国語科校内研究授業(12月)
- ◎1年単式国語科校内研究授業(2月)

- 「自分の考えをまとめ、交流しよう」想像力のスイッチを入れよう(5年)
- 「自然に学ぶ暮らし」(6年)

実践から得られた学年別指導のポイント

●どちらの学年を重点的に支援するのかをあらかじめ決めておき、重点的に支援する!

複式学級では、単式学級に比べ直接指導する時間が限られます。学習する内容ごとに毎時間誰を中心に支援するのか、どちらの学年を重点的に支援するのかをあらかじめ決めておき、重点的に支援しました。

☐直接指導と間接指導は、毎時間必ず半々である必要はありません。目標を達成するためにはどのような配分が良いのか、柔軟に検討しましょう。

●間接指導時に児童の思考が深められるよう教師の支援を工夫する!

めあてと学習の手順を知る導入場面と、学習の振り返りを行う終末場面は2学年とも同時に直接指導を行い、それ以外の時間は主に同時間接指導により学習を展開しました。同時間接指導時の支援においては、個人思考の場面ではどのような支援をするのかあらかじめ決めて支援したり、集団思考の場面では注目してほしい重要な言葉を決めて、児童から出なかった場合は教師がその言葉を示したりし、児童の思考が深められるようにしました。

☐同時間接指導には、教師がどちらの学年にも個別の支援ができるよがあります。集団思考の場面では、児童にまかせつつも目標が達成できるよう、必要に応じて教師が指導することも大切です。



●「全文掲示」に一人ひとり色を変えて書き込みをし、評価と支援に生かす!

物語文の学習では、あらすじを掴んだり、構成を大まかにとらえたりするのに「全文掲示」を活用しています。「全文掲示」に線を引く際、使う色を一人一色ずつ決めてそれぞれに書き込むことで、間接指導時にも、どの児童がどの文に着目したのかが一目でわかります。教師はそのとらえをもとに直接指導の時に助言をしたり、新たな視点を投げかけたりして、物語の読みが深まるようにしました。まだ線を引いていない児童等への個別の支援も行うことができました。

☐模造紙やホワイトボード等を活用して、間接指導時の児童の学びを教師がとらえられるよう工夫しましょう。

●「学び合いで使う言葉」を全教員で共通理解し、質の高い話し合いを目指す!

単式学級である低学年の時から、学年に応じた学習のルールの確認とまとめ方、発表の仕方を示して経験を積ませていきます。複式学級のガイド学習では、国語科におけるガイドが使う言葉の表を学級に掲示したり、児童に持たせたりして日頃から使えるようにしました。「学び合いで使う言葉」の表を作成し、教師も確認できるようにしました。

☐低学年は単式で、中学年から複式になる学校も多くあります。そのような場合も、低学年の単式学級の時から、ガイド学習を意識して指導することが大切です。



●学習リーダーを支える学習環境を整える!

間接指導時は、学習リーダーの進行によるガイド学習を行いました。学習リーダーは輪番制で、全員が経験を重ねていけるようにしています。また、学習リーダーを支える学習環境を整えるために、1時間の学習の進め方について、全員が確認できるよう1時間の流れを掲示したり、1時間の振り返りの中で、今日の学習の進め方で困ったことを出し合ったりしました。児童同士の支援も大切にしました。

☐うまく司会ができる学習リーダーを育てることに目が向きがちですが、よきフォローを育てることこそが大切です。学習環境を整えつつ、支え合い学び合えた姿を認め、ほめましょう。

●ガイド学習系統表を作成し、低学年、中学年、高学年で育てたい力を整理する!

低学年から高学年への積み上げを大切にして、ガイド学習系統表を作成し、単式、複式に関わらず共通理解を図って指導しました。ガイド学習系統表には、学習リーダーの役割や、学び合いの場面、振り返りの場面においてできるようになってほしい姿等を整理しています。系統的、継続的に取り組むことで学習リーダーのスキルを高めることができました。

☐具体的な姿で、ガイド学習において目指す姿を整理することは、学校全体で共通理解するうえで、とても効果的です。

